# ALICE GEAR Anthology

アリスギア・アイギス アンソロジー

## ■ふたなり宙域 合同調査任務

FutanariAirspace Joint research mission

# ■ふたなり宙域合同調査任務

# ■目次


4P～　MoTo

12p～　MOJA

18p～　のだ

24p～　すずのもく

28p～　何処テトラ

32p～　悟り

37p～　MARUICHI

40p～　わいわい

42P～　UMA

43p～　ひろぽん

44 p～　ぎゅーどん

45p～　葵 空

46p～　エクシー

絵 / ピースメーカー

54p～　キョウ

58p 水鏡～

60p　執筆者コメント＆おくづけ

# ■ふたなり宙域合同調査任務

すう

すう

……ん

ガバッ

あ

おふぁふぉっふ
（おはよっス）

かぽ

口にモノを入れたまま
喋るな金潟すぐみぃ！

そふぉっふか

あ、ちょ

ぬぷ

ぬぷ

やめ、やめなさっ

あっ

あうぅ！

ん
ちゅぱ
ん
ズロ
はぁ
朝の一番搾りミルク
美味しかったっスよ
安里ちゃん♪
そっちは
どうだったっスか？
……か
ぷくー
か？
金潟
すぐみい
アンタ朝から
何してんのよ
何って
ナニっスよ？
ああ成程、ナニね
って冗談言っんじゃないわよ
説明しなさい！
いやー安里ちゃん
ノリツッコミ上手っスね
ガバ

アンタ話聞いてる？
朝から人の…ペ、ペニス？
何咥えてんのよ！

いやそれ以前にどうして
安里に生えてるの！？

ずーん

…実は

…実は？

安里ちゃんとの情事も
すっごくいいんすけどー

何か物足りなくなってー

来弥ちゃんに相談したら
アーバンnetを
紹介されましてー

にへへ♪

生えるクスリ
あったんで
買ってー

昨晩…

安里ちゃんに

仕込んだっス♥

金潤すぐみいてへ

ペカー

何勝手に仕込んでんのよ！第一タチならあんたじゃない

ドン

あははー、安里ちゃんに気持ちよくなって貰おうと思っただけッスよー気持ちよくなかったッスか？あたしのお口

そ、それは気持ちよかった…けど、さ…

あと、それは何回か射精したら勝手に消えるそうッス。ーだから

いいッスよね安里ちゃん

ギュ

え

ちんぽーん

あっ

ぶっ

ぶっ

さっ触るなぁ

何ですぐみにも生えてんのよ！

安里ちゃんの為ッスから♪

し、仕方ないわね金潟すぐみ…

安里ちゃん…

…なによ、すぐみ

にゅ

ぬぬっ

大好きっスよ

…うん、知ってる

…じゃいくっスよ

ぴと

ぴくっ

ムロォ

[redacted]

うん…安里にすぐみの、ちょうだい

すりすり

[redacted]

嗚呼…安里ちゃんのすっごいッス

まぁ

キッ…

これが…金潟すぐみの

あっ

なにこれ

すぐみのチ○ポ
すごすぎっ
おかしくなっちゃ

あっ、その顔
もっと見せて欲しいっス

ぷっ

ぷっ

ズチュ

ズチュ

ズチュ

ズチュ

ズチュ

ズチュ

ズチュ

ズチュ

ぷっ

ぷっ

ぷっ

はーっ
はーっ
はーっ
ぐいっ
ぐいっ
ぐいっ
ぐロリ
まだみたい、っスね
ひくっ
……責任取りなさいよね
ぐロォ
りょーかい、っス
あぁっ金潟…すぐみ

おはようございます!!

ばん!

怜!!

ちょっと相談いいですか!!

ハル

?

ちんぽ

え？

はぁ…

キツかったぁ

どうしたの

これ？

生えたって

ビクッ

ビクッ

いやぁ

朝起きたら

こうなってて……

生えました

大丈夫？

ずっと

ムズムズしてて

学校でも

ずっと収まらなくて

どうしたら……

ビクッ

ビクッ

どうしたらと……

言われても

ビクッ

ビクッ

ひらり

あ

こいつが

原因か

『射精せば治るでござるよ!!』

見られてる？

通りすがりの変態忍者

ぬぎぬぎ

ぬぎぬぎ

お邪魔

ぬぎぬぎ

ぬぎぬぎ

あ♡
ビクン
待っ
ビクッ
びりびりっ……
びくっ
て
んん♡
びくっ
すごっ♡
ビクッ
ビクッ
ビクッ
それっ！
あっ
ビクッ
夜露の『これ』大きい……
ちゅるる
ちゅる
ココが弱点みたいだね
ペロペロ
ペロペロ
全部咥えられないんだけど……
ん……でも
ちゅぷ
ちゅぷぷ
ぷぁ
そろそろ射精そう？
はぁ
はぁ
もうイッてほしんだけど……
ふーっ
ふーっ
ビクン
ビクッ
ビクン
はぁ
トクン
トクン
トクン
トクン
ねぇ？夜露？
わ…すごいね
黙ってないでどうなの？
って？
ガシッ
え？
まって！
ちょ……本気？
まって！
びくっ

ぐぽ！ぐぽ！ぐぽ！

待って待って顎、外れるって!!

嘘っ!! このまま射精すの!?

ビクビクビクッ

ビクッ ビクッ ビクッ

すみません！

すみません

ぴくっ ぴくっ ぴくっ

ぴくっ ぴくっ ぴくっ

喉の奥にっ やだっ……

ぴくっ ぴくっ ぴくっ

すみません キモイです

すみません

あっ あっ

止まらなくて……キモイっ

ぴくっ ぴくっ ぴくっ

いいから手、離して

ドクン ドクン

ぴくっ ぴくっ ぴくっ

怜のお口すごい気持ち良くて

我慢できなくて

ぴくっ ぴくっ ぴくっ

ドプ ドプ ドプ

は――っ ちょっと……押さえつけないで……

コポ コポ コポ

ぴくっ ぴくっ ぴくっ

は？

すみません……本当に……

あのっ でも……まだ全然収まらないので

続け……ますね

ハーハーですよね

もうっ
あの蛙忍者
やっぱり適当……

ぱぁん

冷っ

ぬくっ

ぬくっ

ぱぁん

ぱぁん

ぱぁん

ぴくる
ぴくる
ゴポ
ゴポ
ぴくる
ぴくる
ぴくる

アマルテア女学院
空き教室の一つ

私、仁紀藤奏は
今日も風紀を
守ります

え……と
コロちゃん？

生えちゃい
ました♡

そっかー♡

とは
ならないよっ！！

というわけでー
わかったっ！
いつもどおりに
するからね！

あっ♡ナデちゃ…♡

ん♡

ん♡

ジュポ ジュポ

あっ♡

も、だめかも…

ジュポッ

ジュポッ

コロちゃん気持ち良さそう♡

ハァ

ハァ

んあ♡

なんだかわたしもムズムズしてきたよ

もぞ

もぞ

あん♡

ぷはっ

トローダウン

ねっコロちゃん
もっと気持ちよく
なりたくない？

ど、どういう
ナデちゃ……

こういう
ことつ！

ふわ！

ドサッ

横になろっか
コロちゃん♡

んぅ♡
やぁ♡
じゅぱ
じゅぱ

ナつ
ナデちゃん

んー？

……んね

ごめんね……
ナデちゃん

え？

挿れる
からね…

コロちゃ…
あ♡

挿入って…！
ん♡

ぬるぷ♡

んんっ♡

ゾクゾク

あっ♡

ばっちゃばっちゃ

ナデちゃんの膣内(なか)！

からみついてくるよっ！

もっともっと♡早くだよっ♡

ナデちゃんのお尻！柔らかい！

腰が！腰が止まらない！止まらないよナデちゃん！

コロちゃんを！感じろ♡

ナデちゃん♡で射精ちゃうよ♡

あっ♡あっ♡イッちゃう♡

■■

なアマ女のお二人で、
たなりセックスはとてもロマン
溢れてるけど、やはりここは王道を
ちえコロで妄想するのが、正義なのかな
正義な気もするけど、幼馴染である
紀藤さんと州天頃さんの結局は離れ
ない友情、親愛の情を行為という
で表現するのが私は好きか

妄想☆
迷走☆
暴走☆

ガチャリ

これは
エミッション適正者の
ふたなり化…

ただいま。

おっかえり〜！

通称「エミちん」が発症した
百科文嘉と…

見て見て！
「ナマゾン」からついに
オナホ届いたぜ〜!!

ふるん♡

何よソレ。
まくら？

メガネのレンズ
外れとるのか？

ふたなり化を治す為
毎晩射精のお手伝いをする
兼志谷シタラの物語である。

# 文嘉の股間に ヴァリアントMFsが 生えた話2.5 -淫具編-

すずのもく

ゲームだのプラモだの
よくわからんプニプニ
したまくらだの…

そんなくだらない
オモチャ
ばかりじゃなくて

少しはお互いの役に
立つものを
買いなさいよ！

ぷっぽ

どーよ！
役に立ってない？

びくん

ぷっぽ

ぷっぽ

たってる

たってるっ

たってまぷっ

ぷっぽ

ぷっぽ

ぷっぽ

ぷっぽ

ぷっぽ

ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ビクッ
ビクッ
それで初オナホの感想は？気持ちいい？
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
きもちいい
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ビクッ
ビクッ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ
ぐぽぐぽ

ぷは～❤
ぷぷっ
はー❤
はー❤
うんまっ…❤
ドロォ…❤
ぢゅるるるるるる…❤
ぢゅるー❤
ぢゅるー❤
ぢゅるー

何時からこうなってしまったのか
二子玉さん
どうかされましたかぼうっとされて
ずいっ
ぶい
い、いえ
大変お疲れのようですが
ピクッ
休憩されてはいかがでしょうこちらのお仕事はやっておきますので
ずりっ

すみません！私ちょっと！

タッ

バタン

何かあったのでしょうかだいぶ姿勢も悪いようでしたが

ゆみーーz

…

駄目全然集中出来ない

いつからこんなに気になるように

ん？

ドキ

ドキ

私じゃない私じゃないの悪いのは全部

全部

これのせいだから

…。

速く、処理しなきゃ…

にぎっ

皆に怪しまれる前に戻らなきゃ

シコ

シコ

は、、、!?

安里ちゃん…

エッチ…しないっスか?♥

どう♥

どう♥

いや…そのそう言う事は正しい順序をふんで…好き同士がその…えーとあの…

したくないっスか?

ドン!!

ヒィ!!

私じゃダメ…っスか?

そんなことないけど急すぎて心の準備が…

時には勢いも大事っスよ♥

そ…それじゃあよろしく……

包茎さんですね…安里ちゃんと同じ恥ずかしがりやっス
恥ずかしいから言わないで…！
ちょっと待って！
いただきまーす♥ あ～ん
待たないっス♥
バイ♥
どくん!!
反応が可愛いっス
はぁ!!♥
上手に剝けたっス♥
アクゥ♥
ア…♥
ハァ♥
ダメ!!
なにかくる!!
どうってことないっス♥
予想より大きい…でも！
だめ!! はぁぁ♥♥
ジュル～♥

プハァ♥
ハ〜
ドクッ ドクッ
ゴゴゴゴゴ
カ〜なぁ〜がすぅ〜ごくぅ〜〜
ちょっと苦いが癖になる味っスね!!
ブイ!!
ごちそうさまでしたっス♥
ゴク
ゴク
ビクッ
え……さっきよりおおきくなってないっスか……
どうしてくれるのよこれ!!

来てくださいっス♥♥♥
キュンキュンに締め上げてそんなにうれしいの!? とんだ変態ね!! 金潟すぐみ!!
ネ♥ブ♥
パンッパンッ
ありがとうございます♥♥
私の中安里ちゃんでいっぱいっス♥

結局流れで最後までしちゃったけどどうしてあんな誘い方してきたのよ？

安里ちゃん奥手だから強引に行かないとずっとこのままだと思ったからっスよ……

でもですね……本当に好きな相手にしかこんな事しないっスよ♥

好きっス…安里ちゃん❤

な!!何よそれ……

好きよ金潟すぐみ

すぐみって呼んで欲しいっス…

こんな形で告白って変なところ不器用ね

ん…♡

ほ…

つぷぁ♡

ん…っ♡

早く答えが欲しいっス

あれあれ～安里ちゃんまた固くなってきたっスよ❤

すぐみ!!

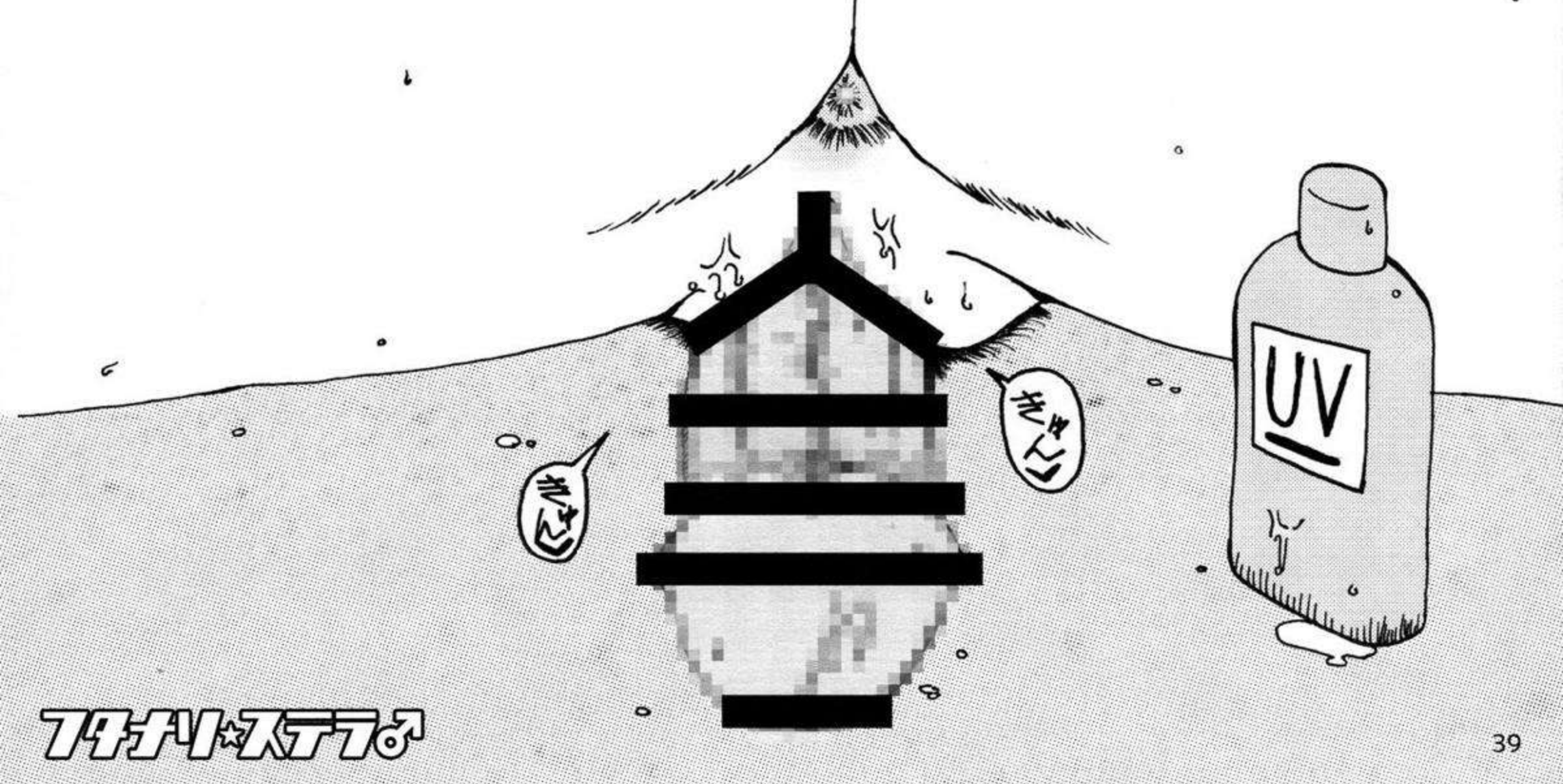
このおあとまた無茶苦茶エッチした。

あん

はぁ
はぁ
あー…我慢できなくてシャワールームでしちゃったー♡いやーまいったねー…♡♡♡
フタナリ★ステラ♂
MARUICHI

（た、隊長さんに…わたしのおちんぽ…見られて…、緊張する…）
わぁ
（み、密室で男の人と、二人っきりだなんて…♡♡♡♡）
ビリッ

隊長、私のペ○スを
楽しむのもいいけど
お尻も楽しんで欲しいなぁ♡



BANG!!
FUTARI NISIKA TANOME NAINO...
ASAOKITARA NANKAHAETETE...
MAJIDE DEKAI YO...
PE... PENTAGON SYA-DO...
HOOO

YeS♡TokA SI-HA-♡TokA IWANAI NO NE...
TA PU
TA PU
YAYoI♡ SIGOKUNO JYOUZUNE♡
KOSURUNO TUKARERUYO...
KONNANO HOMERARETEMO URESIKUNAI Yo!
SIko♡
SIko♡
BYU BYU BYU

朱音チャンはみぎがわ

ふたなり
マクトゥルズ
すぐるつへル
#。

ある日起きたら生えていた。
成子坂のみんなにもみんなもあったという。
加純さん曰く、「活動し始めて一年ほどで生えてくる。」らしい。

大きさや長さで潜在性がわかるのだという。
加純さんや山野さんからもお褒めの言葉を
いただいた。
もっと頑張りたいけど少しムラムラして、
「射精」というものをしてしまった。
それを伝えたら、加純さんが明日何とかし
てくれる、と言っていた。 すごく気持ちがよかった。

成子坂製作所業務日誌より抜粋
翻訳　バージニア・G

アリス・ギア・アイギスふたなり小説

# 秘密のシャノアール

著／エクシー
絵／ピースメーカー

最初に思いを伝えてきたのは、深沙希のほうだった。

「シャノアールさん……」

深夜の廃工場。そこで芹菜はいつものように深沙希と「一仕事」を終えたところだった。芹菜はシャノアールのスーツとバイザー。深沙希もアラーニェのスーツをバイザーを身に着けたいつものいでたちである。無事目的の証拠物件も手に入り、追手も完全に巻いた。この廃工場での最終確認も終わり、本日はこのまま解散となるはずだった。

だがそこで、深沙希が突然芹菜を背後から抱きしめてきた。彼女は芹菜の背中にそっと頬を寄せ、甘えるように体を密着させてくる。

「え……み、深沙希さん？」

深沙希の行動に困惑の声を漏らす芹菜。今の今まで、深沙希がこんな形で芹菜に抱き着いてきたことはない。深沙希の豊満すぎるバストが芹菜の背中で押しつぶされ、硬くとがった乳頭の感触が芹菜をくすぐっていく。

「もう……我慢が出来そうにありません」

芹菜を強く抱きしめながら、深沙希はしっとりとした声音でそう告げる。その声音を、芹菜は以前も聞いたことがあった。確かある日、来弥を交えて三人でお茶をした時だ。あの時、深沙希は芹菜と来弥にずっと友人でいてくれるかと、どこか泣きそうな表情で問いかけてきた。もちろん芹菜と来弥は即座に首肯で返し、それに深沙希は口元を抑えて喜びを露わにした。その時の声と全く同じ声が芹菜に向けられている。

深沙希が大切な「旦那さま」を失っていることは知っている。法事にも参列したくらいだ。だから深沙希がどれだけ胸に寂しい気持ちを抱えているかも、自分たちを大切にしてくれているかもわかる。シャノアールという完全違法な存在を許容してくれているのも、深沙希がそれだけ芹菜を受け入れてくれている証拠だ。

だけど、まさか。

まさかこんなに情熱的に抱きしめられるなんて思ってもみなかった。少なくとも芹菜にとっては、完全に想定外の出来事である。

「お慕いしております……あなたのことを、誰よりも……」

「そ、それって……」

深沙希の口調から察するに、おそらくそれは告白なのだろう。女性同士で、しかも芹菜は犯罪者同然の立場。にもかかわらず深沙希は腕の力を緩めることなく、ようやく母を見つけた迷子のように力いっぱい芹菜を抱きしめ続ける。

「精いっぱいご奉仕いたします……この身も心も、全て捧げます。ですから……」
「ま、待って深沙希さん……。その、えっと……非常に言いにくいんだけど……」
しどろもどろになりながら深沙希の手を取る芹菜。戸惑いまくりではあるが、しかし芹菜とて深沙希の告白を断るつもりは微塵もなかった。芹菜も友人として接していく内に深沙希に心惹かれていたのだ。共に裏の仕事を進めていくうちに不思議な仲間意識が芽生え、秘密を共有するような楽しささえも感じ始めた。それがいつしか愛情という形をとり、芹菜も深沙希を意識するようになっていたのだ。
しかし、だからこそ一つ、大きな問題があった。
芹菜には秘密がある。そしてその秘密は、深沙希と関係を進展させたいのであれば決して秘密のままに出来ないものだった。
「実は私……まだ深沙希さんにも言っていないことがあって……」
「存じております……」
そっと、深沙希が芹菜の足の付け根の中央に手を伸ばす。しかしその手は、スーツの下に隠れているであろう女性器の直前で止まる。ちょうど男性だったら、そこに陰茎が生えているであろう位置で。
「ふふっ……既に大きくなられていますね。シャノアールさんの逞しい男の子……」
「ど、どうしてそれを……!?」
深沙希の言葉に、芹菜は動揺を隠せない。なぜならそれは、芹菜にとって人生最大と言っていいほどの秘密だったのだから。
芹菜は男性と女性の両方の生殖器を持る存在――つまりふたなりとしてこの世に生を受けていた。このことは家族以外誰も知らない。親しい友人にも徹底的に秘密にしてきた。知られればきっとろくなことにならないと思っていたからだ。万一気づかれそうになっても、どうにか手を尽くして必死に隠してきた。そのためならなんでもしたというのに、一体どこで気づかれてしまったのか。
「以前シャノアールさんのことを調べさせていただいたことがありまして、その時に……。もちろん、他の方には秘密にしております」
さすがはAEGiSの捜査官というべきか。芹菜のことは全て調査済みということらしい。この分だと、ふたなりであることは随分前から知られていたとみて間違いなさそうだった。
「そうした方がいらっしゃるのは知っていましたが、お会いしたのは初めてです……」
「き、気持ち悪くないんですか……？」
芹菜にとって、己に備わった男性器は悩みの種でしかなかった。なにせ明らかに普通ではない体だ。芹菜の秘密のほとんどを知る深沙希であっても、この体まで受け入れてもらえるかは芹菜もわからなかった。
しかし深沙希は、芹菜に嫌な顔一つ見せなかった。
「どのような体であろうと、私がシャノアールさんをお慕いする気持ちに変わりはありません……」
芹菜の陰部を撫でまわしながら、深沙希は芹菜の背中に乳房を肉感たっぷりに押し付けてくる。それだけで芹菜はお腹の奥が熱くなり、股間に血液が集まっていくのを感じてしまう。深沙希の体を欲して、小さかった肉の棒がゆっくりとその姿を剛直に変えていくのがわかる。
「よろしければ……お慰みをいただけませんか？」
深沙希が芹菜の耳元でささやく。それだけで芹菜は全身が泡立ち、秘裂から淫欲の蜜まで漏れさせてしまう。
触ってほしい。こんな自分を受け入れてくれた深沙希に、気持ちよくしてほしい。
そんな思いにすぐ埋め尽くされた芹菜は、深沙希の問いにゆっくりと頷いていた。
「まぁ……ご立派」
うっとりした表情を浮かべながら、深沙希が熱い吐息を漏らす。その視線の先には、深沙希の前で大きく足を開いた芹菜と、外気に晒された肉棒の姿があった。
すでに十五センチ以上の大きさを誇っている芹菜の男性器。他の人間には一切許したことのない性感欲棒は、深沙希を催促するように小さくビクビクと跳ねる。早く触ってほしい。今すぐ竿をしごいて欲しい。そんな思いの中で、精巣から凄まじい勢いで精子が駆け上がっていくのがわかる。
「シャノアールさん……目を閉じていただけますか？」
「こ、こうかしら……？」
「はい……それでは……」
深沙希はゆっくりと、芹菜の唇に自分の唇を重ねていた。芹菜がバイザーをつけたままなので顔を大きく傾けねばならなかったが、しかしそんなことすぐに気にならなくなるくらいの衝撃が芹菜の脳裏を突き抜けていった。
深沙希のふにふにとした唇。それが芹菜の全身を欲情の熱を送り込んでくる。深沙希はすぐに舌を差し込んできたが、まるで不快感はなかった。むしろ芹菜は積極的に舌を絡めあう。舌と舌を口の中で躍らせ、互

いの唾液を味わうのが気持ちよくて仕方なかった。
この時すでに、芹菜と深沙希に理性らしい理性など備わっていなかった。体が芯から熱くなり、乳房の先が疼く。肉棒は深沙希を欲するあまり、早くもその先端から先走りを溢れさせてしまっていた。
「そろそろ、触ってよろしいですか……？」
「えぇ……その、お願いするわ……」
「はい。仰せのままに……」
小さく微笑んだ終えた深沙希が、最後に芹菜の唇を舐めながら専用スーツを脱ぎ捨てていく。
晒された深沙希の乳首は、既に乳輪ごと大きく膨れ上がっていた。
「まずは、こちらを気持ちよくして差し上げますね……？」
深沙希は芹菜の豊かに実ったバストに顔を埋める。そしてそのまま芹菜の先端に舌をそっと伸ばしてきた。
「れろっ……ちゅっ……ちゅぱっ」
「ひゃっ、あぁっ……！」
ちろりと深沙希の舌先が胸の先端に触れる。それだけで芹菜は大きく腰を跳ね上げてしまう。先ほどまで舌で味わっていた深沙希の口の中。それが芹菜の乳頭を優しく愛撫する。たっぷりと唾液を絡ませた舌が容赦なく芹菜の乳首に塗りたくられ、口の中の熱と相まって芹菜は自慰でも感じたことがないほどの快感を乳首で受け取ってしまう。
「もっと舐めて差し上げますね……？　ちゅぷっ、あむっ、れろ……」
芹菜の反応に気をよくしたのか、深沙希が口に含んだ乳首を舌で激しく転がしてくる。普段の大人しい深沙希からは想像もできないほどの速度だ。それだけでも芹菜は乳房全体が気持ちよくて仕方ないのに、さらに深沙希は音を立てて芹菜の乳首を吸い上げてくる。芹菜の脳天に凄まじいまでの快感電流が走り、その大きさを証明するように深沙希の口の端から淫靡に唾液をこぼれていく。すぐに芹菜の乳房は深沙希の唾液だらけになり、母乳でも噴き出したようにびしょ濡れになっていく。
「あ、あぁっ……深沙希のさんの舌……気持ちよくて……あ、あぁぁぁっ……！」
乳首を愛撫されながら、芹菜がその強すぎる快感に声を漏らす。そのあまりの気持ちよさに芹菜の乳房の中で乳腺がうごめき、出もしない母乳を出そうと乳房の中で蠢き始める。そんな動きでさえ芹菜には快感をもたらす運動でしかない。いつまで経っても出てこない母乳がもどかしいとでも言いたげに、乳管さえも軽く開いてしまう。
「ふふ……綺麗で、可愛らしい乳首ですね……」
それを待ち受けるのは深沙希の舌だ。唾液まみれの深沙希の舌が芹菜の乳首――そしてその奥の乳管さえも舌先で愛撫してくる。母乳の出口であるはずのその管に深沙希の唾液がゆっくりと入り込み、芹菜の乳房を内部からねっとりと侵食していく。
「あ、あぁっ……深沙希さん、そんな……！」
誰にも許したことのない母乳の通り道を深沙希に犯されていく。その淫靡な光景を見ただけで、芹菜の乳首はさらに硬さを増してしまう。足の間にそびえる秘裂からも大量の愛液が溢れ出し、その少し上に備わった肉棒も刺激を欲してビクビクと痙攣を始めていく。
「では、そろそろこちらを……」
深沙希は物欲しそうに震えている肉棒に手を伸ばし、その根元をぎゅっと握りしめてくる。
「ひゃっ……ぁっ……！」
直後、声にならない悲鳴が芹菜の喉から漏れる。今までとは段違いの刺激が全身を駆け抜け、あまりの快感に芹菜の乳房がぶるんと大きく震えてしまう。
「擦っても大丈夫でしょうか？」
「え、えぇ……むしろ、その……早くしごいて欲しいわ……」
「はい……お任せください」
深沙希が芹菜の肉棒を右手で握りしめ、そのまま上下運動による摩擦を開始する。それだけで芹菜は全身をぞくりとした快楽に支配されてしまう。触られているのは陰茎だけなのに、全身が内側からくすぐられているようだ。その感覚はすぐに巨大な快感となり、芹菜の体を淫欲に支配していく。
「もっと速くいたしますね？」
「あっ……ま、待って……！　そんなにしたら……私……！」
宣言通り、深沙希は右手の上下運動を加速させていく。芹菜は咄嗟に下腹部に力を込めてその手淫に耐えようとするが、深沙希はすぐに手首にひねりを加えてくる。初めて手淫を受ける芹菜にとっては我慢できたのが奇跡のような攻めだった。それだけ深沙希は容赦がない。一切の手加減なしで、芹菜を気持ちよくしようとしてくれているのがわかる。
「私の乳首もつまんでいただけないでしょうか……？」
快感に耐えるために閉じていた目を開けると、目の前に深沙希の豊満すぎる乳房があった。いつも専用スーツを下から大きく突きあげている膨れた乳輪。その中央には、物欲しそうに尖った桜色の蕾がある。
「先ほどから乳首が疼いて仕方ないのです……。よろしければ、私の乳首にもお慰みをいただきたく思います……」
「別にいいけど……本当、いつ見ても大きいわね……」

「言わないでください……。自分でも破廉恥だと思っておりますので……」

顔を真っ赤にしながら、深沙希はわずかに視線を逸らす。しかしそんな恥じらう様子とは裏腹に、深沙希の乳首は芹菜の陰茎のように大きく膨らんでいく。指でつまめば、そのまま母乳でも出てくるのではないかと思うほどだった。

「いじめてください……私のはしたない乳首を……」

深沙希が芹菜の口元に、大きく膨れた乳首を差し出してくる。それを芹菜は、なんのためらいもなく口の中へと招き入れた。

「あっ……！」

口の中に深沙希の乳頭を含むなり、深沙希の声に歓喜の色が混ざる。いつも物静かにしている彼女からは中々聞けない類の声だ。その硬く張り詰めた乳首を舌で舐めてやると、深沙希は再び嬌声を上げながら大きく体を震わせ始める。

「あ、あぁぁぁっ……！　い、いいです……乳首を舐めまわされるの、とても気持ちいいです……！」

乳首から受け取る刺激があまりにも強いのだろう。深沙希は体だけでなく声も震わせながら、芹菜の舌愛撫に全身を大きく痙攣させる。だがただ気持ちよくなるだけではない。深沙希はそのお返しと言わんばかりに芹菜への手淫を再開し、芹菜の体に甘い快楽を叩き込んでくる。

「んぷっ……!?　ん、んぅぅぅぅぅ！」

芹菜は深沙希の乳首を舐めまわしながら、駆けあがってくる射精感を必死に堪えていく。芹菜も自分で肉棒をしごいたことはあったが、しかしここまでの快感を得られたのは初めてだ。しかも女性の乳房を舐めながらなんて夢想したとすらなかった。

（これ、いいわ……。このまま排卵しそうなくらい気持ちいい……）

異常な光景だと思いつつも、そこに芹菜は熱い興奮を覚えていた。肉棒と乳房で性感電流を交換し合うのが気持ちよくて仕方ない。肉棒刺激によって吹き荒れる芹菜の欲望は、芹菜の舌を通じて深沙希の乳首に何度も塗りたくられていく。

「あっ……ふぁぁぁっ……！　い、いいです……シャノアールさんに舐められる乳首……気持ちよくて私……私も……！」

快感にその身を震わせながら、深沙希は淫欲に染まり切った顔を芹菜の乳房に押し付ける。そして芹菜を真似するように、深沙希も芹菜の乳首を強く吸い上げ始めた。無論右手は激しく手淫を続けたままだ。

「んむっ!?　ん……あぁっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

乳首と肉棒。その二箇所に信じられないくらいのしびれが走る。その

あまりにも強烈な快感に、思わず芹菜は深沙希の乳首を口から離してしまう。

「あぅっ……！　み、深沙希さん……これ……強すぎて……！」

乳首と肉棒。その二つを持つ芹菜だからこそ味わえる二重の快楽。そのあまりの大きさに芹菜はおとがいを逸らし、秘裂から大量の愛液を噴き出しながら腰をくねらせる。全身が快感に泡立つ。少しでも気を抜いたら、すぐにでも絶頂を迎えてしまいそうだった。

「そ、それ……ダメ……！　両方なんて……ひゃっ、にゃぁぁっ！」

腰が勝手に跳ね上がる。その反動で乳房が大きく揺れるが、深沙希の口は芹菜の乳首を離さない。図らずも引っ張られる形となった芹菜の乳首はその負荷さえも甘い刺激として受け止め、さらに肉棒と乳首に強烈な快感をほとばしらせていく。

「あぁぁぁっ！　あむっ……んむぅぅぅぅぅぅぅぅ！」

もはや制御し切れない快感の中、芹菜は無我夢中で深沙希の乳首を口の中に含んでいく。深沙希を感じさせてやれば、きっと彼女はもっと芹菜を気持ちよくしてくれる。よく尽くしてくれる可愛らしい恋人を悦ばせるために、芹菜は一心不乱に乳首を舐め回し続ける。

「あ、あぁっ……！　シャノアールさん、もっと……乳首を引っ張って……！　ぺろっ……ちゅぱっ……んむっ、れろれろ……んちゅ」

「ちゅぷっ、ぴちゃ……ぢゅるるっ！　ちゅるる、ちゅぅぅぅ……！」

お互いの乳首を舐めまわす淫靡な水音が辺りに響き渡る。既に芹菜の肉棒も鈴口から溢れ出した先走りで汁ぐちょぐちょだ。芹菜と深沙希がそれぞれの唾液で乳首を愛撫する音に深沙希の手淫の音が混ざり合い、周囲が快感をむさぼるための音で埋め尽くされていく。

もっと気持ちよくなりたい。もっと気持ちよくなって欲しい。そんな思いの中で、芹菜は深沙希の乳首に歯を立てる。軽く挟む程度の甘噛みだったが、しかしそれだけでも深沙希には相当な刺激だったらしい。

「んくっ!?　あ……あ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

直後、聞いたこともないほどの大きな声が深沙希から響いた。深沙希は全身を激しく痙攣させ、二つの乳房を大きく震わせる。深沙希の秘裂から大量の愛液が溢れ出し、周囲に深沙希の匂いが充満していく。

乳首で絶頂を迎えたのだ。だがその間も深沙希は手を止めなかった。それどころか、芹菜の肉棒を握りつぶさんばかりの勢いで強く圧迫してくる。上下に擦る速度も速めながらだ。芹菜の肉棒に過去最大のしびれが叩き込まれ、芹菜は思わず絶叫してしまう。

「あ、あぁぁっ……！　深沙希さん……そんなにしたら、私……っ！」

もう我慢などできるはずがなかった。芹菜は肉棒の快感に悶え、それでも必死に射精をこらえようとする。しかし深沙希の手がもたらす容赦ない性感摩擦の前では全てが無力だった。

「わ、私……い、イクッ……イッちゃうのぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

肉棒の中を精液が駆け上がっていく。その例えようのない快感を覚えたとき、芹菜は大量の精液を吐き出してしまっていた。まるで噴水のような勢いで飛び出した精液は一瞬で深沙希の全身を真っ白に汚し、あちこちにどろりとした糸を引き始める。深沙希は長い黒髪も胸の谷間も白濁液でいっぱいだ。今の彼女は、精液のプールに飛び込んだのかと思うくらい精液まみれになっていた。

「だ、だめ……まだ、出る……！　あ、あぁぁぁぁっ……！」

深沙希を精液でドロドロにしておきながら、まだ芹菜の射精は続いていた。出しても出しても物足りない。頭がおかしくなりそうなほどの強い快感に脳が痺れているのに、肉棒が射精を止めてくれないのだ。

「あ、あぁっ……あぁぁぁぁぁ……」

三分ほどして、ようやく長い射精が終わる。だが芹菜の肉棒はまだ硬いままだ。もっと深沙希を白く汚したいと言わんばかりに、芹菜の精巣が新たな精子を生み出し始めていく。

「ふふ……まだ物足りなさそうですね……」

体に付着した精液を両手で胸に塗りたくりながら、深沙希が艶っぽい笑みを浮かべる。その目つきを見れば、深沙希が満足していないことも明らかだった。

「もっといやらしいこと、してみますか……？」

深沙希は自分の胸を下から大きく持ち上げる。

その扇情的な光景に、芹菜は肉棒を震わせることで頷いていた。

「では……私のお乳で、気持ちよくしてあげますね」

深沙希のあまりにも大きな胸。その巨大な柔肉が芹菜のグロテスクな肉棒を包み込んでいく。それはあまりにも柔らかく、そして温かい楽園だった。何より見た目が淫靡で仕方ない。あまりの密着間も相まって、芹菜は早くも二度目の射精を迎えてしまいそうになってしまう。

「あぐっ……！　こ、これ……凄いわね……」

「ご満足いただけそうですか？」

悪戯っぽく笑う深沙希だが、満足なんて域ではなかった。まるでマシュマロのような深沙希の乳房は永遠に触れていたいと思えるほど心地よく、芹菜に信じがたいほどの幸福感を与えてくれる。このまま動かれたら数秒ともたないと、そう思えるほどの絶大な乳房だった。

「動かしますね……？」
深沙希が乳房を大きく上下に動かし始める。その直後、芹菜は全身から全てが吸い出されるような感覚に襲われてしまう。精液もなにもかもを深沙希の乳房に吸い取られる。深沙希の乳房に全身を支配される感覚を覚えながら、芹菜は深沙希の胸の谷間に肉棒を擦られ続ける。
「あっ……うぁっ……！　い、いいわ深沙希さん……もっと……！」
「ふふ……かしこまりました」
微笑みながら、深沙希は芹菜の肉棒に自身の乳首を押し付け始める。柔らかさの中に突如として現れた小さな突起。その硬い蕾が与えてくる快感に芹菜はビクリと体を震わせてしまう。だが感じているのは深沙希も同じだ。背筋を伸ばした際にぶるんと震えた芹菜の乳房の間から、深沙希の息が荒くなっていくのが見える。
「あ、あぁぁぁっ……！　私、胸でいけないことをしています……。いやらしい乳首で、シャノアールさんにこんな卑猥なことを……」
頬を上気させながら、深沙希がさらに胸の動きを速くする。乳首を何度も芹菜の竿に擦りつけ、乳房の肉で肉棒全体を強く抱きしめるように動かし始める。まるで深沙希の乳房が性器となったかのような動きだ。すでに精液でドロドロになっている深沙希の乳房は隠微な水音を何度も響かせながら、ただひたすらに芹菜の肉棒を乳摩擦していく。
「深沙希さん……っ……もっと、もっとして……！」
奉仕を受ける中、芹菜もまた無意識に腰を動かしてしまっていた。深沙希の乳房の中がそれほどまでに心地いいのだ。もっと味わいたい。もっと乳房でしてほしい。そんな思いが芹菜の中で射精感とともに大きくなる。深沙希の乳房の中で射精して、もっと深沙希を真っ白にしたくて仕方なくなる。
「では……こんなのはいかがでしょう？」
深沙希は持ち上げていた乳房を少しだけ下におろし、谷間から芹菜の亀頭を飛び出させる。なにをするのかと芹菜がその様子を見守っていると、直後に芹菜の体を強烈な電撃が貫いた。
「れろっ……ちゅっ、あむっ……ちゅるるるるるっ」
「ひゃっ!?　あ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
一瞬、何が起こったのかわからなかった。それほどの快感が押し寄せる中、芹菜は亀頭に伝わる熱さで理解する。深沙希が芹菜の肉棒を胸で挟んだまま口に咥え込んだのだ。深沙希は首を大きく前に倒し、胸の谷間から顔を出す芹菜の亀頭を吸い上げるようにして包み込んでいく。
「じゅるっ、ぢゅるるるるっ……！　あむ……れろれろ……ちゅぷ、ぴちゃ……」
「ま、待って深沙希さん……！　それ以上されたら、ひゃぅぅぅ！」
深沙希は首を大きく動かし、口の中で亀頭に舌を絡みつかせていく。胸に挟まれているだけでも凄まじい気持ちよさなのに、口と舌の同時奉仕までされたら耐えられるものではない。深沙希の口の中の温かさが容赦なく芹菜の肉棒を刺激し、鈴口から大量の先走りを射精のように溢れさせてしまう。
「ふふっ……お乳を動かすのも頑張りますね？」
「そ、そんな激し……あっ、にゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
乳房と口。二つの異なる快感が芹菜の体に至上の快楽を送り込んでくる。深沙希の奉仕のなにもかもが気持ちいい。それほどまでに深沙希の奉仕は激しく、胸と口が上下に往復するごとに芹菜の全身は性感で支配されていく。
「ちゅぷっ、じゅぷっ……じゅぽっ、ぐぽっ……んちゅるるっ！」
「あ、あぁぁっ！　深沙希さん！　もっと……もっとぉぉぉぉっ！」
強烈な快楽の波に飲み込まれながら、芹菜は深沙希に肉棒を捧げていく。既にいつ射精してもおかしくないほど肉棒は大きくなり、先端からはわずかに精液があふれ出している。深沙希はそんな芹菜の肉棒を乳房全体で受け止め、口と舌を使って最も敏感な亀頭を集中攻撃し続ける。
「あ、あぁぁぁぁぁっ！　いいっ、いいのぉっ！　深沙希さんの胸と口、すごく気持ちよくてぇぇぇぇぇっ！」
芹菜は快感に耐えるように、頭を振り乱す。くちゅくちゅと水音を立てながら肉棒を上下に摩擦する深沙希の乳房が気持ちよくて仕方ない。このままずっと、口の中で亀頭を舐めまわされていたかった。
そんな芹菜の思いは、無意識に彼女の両手を動かしてしまっていた。芹菜の両手は深沙希の上下する胸にそっと伸び、そして——
「んむっ!?」
芹菜に奉仕を続ける深沙希の乳首を、芹菜は思い切りつまみ上げてしまっていた。だがつまみ上げるだけではない。芹菜はその乳首を上下に動かすことで、そのまま自分の肉棒を摩擦しようとする。
「シャ、シャノアールさん……!?　そ、それ……刺激が強すぎて……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
乳首をつままれたまま胸を大きく揺らされ、深沙希が悦楽に染まった声を上げる。だが芹菜にそれを構っている余裕なんてない。あまりにも大ボリュームな深沙希の胸は、乳首をつまんで上下に動かすだけでも信じられないほどの快感を芹菜の肉棒にもたらしてくれる。両方の乳首がこすれ合わさるくらい乳房を寄せてやれば、そのまま気絶してしまいそうなほどの快感が芹菜の子宮の奥まで突き抜けていく。

「あむっ、ちゅぷっ、ちゅるるっ！　じゅぽっ、ぢゅるるるっ……！」
そんな芹菜に感化されたのか、深沙希が乳首をつままれたまま口の中に亀頭を誘いこんで奉仕を再開する。自身も乳首がもたらす凄まじい性感の中だというのに、深沙希は健気に芹菜へ口の中をささげていく。乳房を好き勝手される快感の中で、芹菜をもっと気持ちよくしようとしてくれる。
もう射精することしか考えられない。深沙希の胸と口に白濁液をぶちまけたい。そんな思いで芹菜の頭が染まっていく。
だがこの時、芹菜は忘れていた。
今は芹菜が深沙希の乳房を動かしている。そのせいでそれまで自身の乳房を動かしていた深沙希の手が、完全に自由になっていたことに。
――ちゅぷり
「ひぐっ……!?」
突如、芹菜の全身を強烈な快感が突き抜けていった。それは、今まで誰も触れてこなかった場所。普通であれば真っ先に愛撫されていてもおかしくない芹菜の秘部だった。愛液ですっかり濡れそぼっていた芹菜の淫裂に、深沙希は指を二本も沈み込ませる。その上で深沙希は高速で指を動かし、芹菜の膣内を音を立ててかき回していく。

「あ……ダ、ダメ……そっちまでされたら、私……あ、あぁぁぁっ！」
ただでさえ射精寸前だったところへの、不意打ちの性感。それを受けた芹菜に、耐える術など残っていなかった。
「い、い……イクっ……うあっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
爆発するような勢いで腰が跳ね、深沙希の胸と口の中で肉棒が大きく擦れる。
直後、信じがたいほどの快感と共に大量の精液が深沙希の口の中に吐き出されていった。音を立てながら飛び出していく白濁液はすぐに深沙希の口をいっぱいにし、口の端から唾液のように溢れ始めていく。
それでも深沙希は精液を全て飲み干そうと懸命に喉を鳴らし、芹菜の子種を飲み込んでいく。そんな献身的な姿でさえ今の芹菜には毒だ。自分の精液を必死に飲み込む深沙希の姿は芹菜の体を熱くし、深沙希の乳首をつまむ指に自然と力が入る。
「むぐっ!?」
完全に不意打ちだったのだろう。深沙希はその体を何度も震わせ、大きく痙攣を繰り返していく。乳首で絶頂を迎えたのだ。その衝撃があまりにも鮮烈だったのか、深沙希はそれ以上の精液を飲み込むことが出来ず、ついに射精中の亀頭から口を離してしまう。

「けほっ……！　そ、そうなるのでしたら……」
直後に深沙希は、精液を浴びながら自身の乳首を射精中の芹菜の肉棒に強く押し付けてきた。その感触がさらなる快感の嵐を芹菜の肉棒に与えるのと同時に、深沙希は自らの乳首を陥没させて乳輪の中に肉棒を挿入してしまう。
「きゃっ!?　ひあぁぁぁぁぁぁっ！　み、深沙希さんの胸の中、胸の中がぁぁぁぁぁぁ！」
肉棒が乳肉に包まれた衝撃に、芹菜は大きく体を跳ねさせる。もうずいぶん精液を吐き出したはずなのに、射精が止まらない。芹菜は深沙希の乳穴に肉棒の全てを締め付けられながら、狂ったように大量射精を繰り返してしまう。そのあまりの射精量に、精巣が爆発するかと思うほどだった。
「ふぁ、あぁぁぁぁぁっ……！　あぁ……」
それから五分ほどして、ようやく芹菜の射精が収まる。やっと硬さを失ってくれた肉棒はゆっくりと深沙希の乳輪から引き抜かれ、乳輪から溢れ出した膨大な量の精液が深沙希の乳房をドロドロに汚していく。
「ふふふ……まるで、母乳みたいですね」
自分の乳輪から滴る精液を舐めとりながら、深沙希が妖艶に笑う。それはあまりにも扇情的で、どこか美しいとさえ思える光景だった。
「私のお乳……いかがでしたか？」
頬を赤らめながら、深沙希がそっと体を寄せてくる。芹菜はそんな深沙希を抱きしめながら、そっと乳首の先を指で弾いてやった。
行為の後。服を着るのも億劫だと言わんばかりに、二人は裸のままで抱き合っていた。互いの乳房が押しつぶしあい、その頂点にある乳首が淡く擦れあう。そんな小さな快感を愉しみながら、二人はお互いの体温に酔いしれていた。
「シャノアールさん……」
「ん？　なぁに？」
「……またどこかで、抱いていただけますか？」
「えぇ、いくらでも……。むしろ、私からお願いしたいわ」
最初は深沙希の告白に戸惑いもしたが、今となっては告白してもらえてよかったと心から思える。自分の秘密を全て知られたというのに、何故だか嬉しい気持ちでいっぱいだった。
「でも……最後までバイザーをつけたままだったわね。さすがに、もう外してもよかったんじゃないの？」
芹菜がシャノアールであることは明白だ。にもかかわらず、深沙希は芹菜をシャノアールと呼び続け、スーツは脱がしてもバイザーだけは外さなかった。芹菜としては、なにもエッチの時まで無理して知らぬふりをしなくてもいいと思うのだが。
「……私にとっては、シャノアールさんが真の姿ですから」
「そうなの？」
「私はシャノアールさんである、あなたを好きになりましたので……」
よくわからないが、深沙希がそれで納得して言うならとやかく言う必要もないだろう。芹菜は深沙希を強く抱きしめながら、彼女の髪を優しく撫でてやった。
深沙希は仮面をつけた芹菜を愛している。しかも彼女はふたなりだ。傍から見れば、それは奇妙な光景でしかないのだろう。
だけど、と芹菜は思う。
例え相手が同性で、仮面をつけていたとしても。その体が、人と少し違っていたとしても。
そんなもの、好きという感情の前では些末な問題なのかもしれない。それが理由で相手を好きになれないのなら、所詮その程度の感情だということなのだろう。
だから芹菜は、深沙希の髪を撫で続ける。
芹菜も深沙希に負けないくらい、彼女のことを心から愛しているのだから。

La Fin

# すぐやす性活

「ねえ安里ちゃん、今日どうしたんっスか？」
「え……どうもしないけど……」
いつものような昼下がり、金潟すぐみの部屋にて2人で黙々と模型をいじっていた。ただいつもと違うことが少しだけあった、私、新居目安里が小刻みにゆらゆらとしているからだ。自分でも自覚できる。
「うーん、本当っスかねぇ。さっきからモゾモゾして、顔だって赤いし息だっていつもより荒いっスよ」
「なんでもないのよ、さ、そんなことよりはやく続けるわよ、締め切りもうすぐでしょ？」
「でも安里ちゃん、さっきからちっとも進んでないじゃないですか。ぼーっとして上の空だし、かとおもえばこっち見をつめてきたりするし」
ずい、ずいと四つん這いでこちらに近寄ってくる。
「本当、なんでもない、なんでも」
「あんなに、ちらちら、みられたら！」
一言ごとに近づいてくる……
「気が散って集中できないっスよ！　さあはやく観念して教えてください安里ちゃん！」
もう顔が目の前に、ち、近い、近いってば。
「金潟すぐみぃ！顔が近いって……うわっ……」
バランスを崩した金潟すぐみが寄りかかってくるような形になって私もそのまま押し倒されるように後ろへ。
「ってて……もう勘弁してよ……」
上体を起こそうとして感じる違和感。場所は股間から太ももあたりにかけて。
「うへぇー手首捻ってしまったっス、面目な……んん？これ……？」
とっさに股間の辺りを手で隠す、が時すでに遅し。
「安里ちゃん、これどうしたんですか？」
「こ、これは……朝起きたら生えてたのよ」
「あー、そういえば安里ちゃん昨日出撃でした？」
「ええ、そうだったけど」
そう昨日は出撃だったのだ。空いている時間だけのバイトだが普通に働くより割りが良いし皆よくしてくれる。ただ誤算だったのは……
「昨日大型と遭遇しませんでしたか？」
そう、ただの調査のはずだったのに大型と出くわしてしまったのだ、幸いサーペント種だったので難なく倒せたのだが……というかあの蛇、見た目が大きいだけじゃない？
「そうね、確かに大型と戦ったわ」
「そのときSPスキルは？」
「そういえば……隊長がなんかいってたけどサーペントだったし……つかわなかったわ」
「あー、安里ちゃん、それっスよーSPためっぱなしにしておくとたまになっちゃうみたいっス」
「そうなの……」
どおりで今朝おきたら……というわけだ。
「で、どうやったら元にもどるのかしら……その、これ……」
「これ？　これじゃわからないっスよー？何か教えてください」
「あの……その……だ、男性器を……」
「男性器じゃちょっとよくわからないですね、もっとわかりやすく」
そう言うと耳元に口を近寄せてきて。
「おちんちんって、言ってください、そしたら教えてあげるっスよー」
耳元で息を吹きかけられるような調子で話すものだから背筋がゾクゾクと沸き立つ。
「お、おちんちん……よ……」

「はぁーい、よく言えました」
全く顔から火がでそうなくらい恥ずかしい。火照ってきちゃったじゃない。
「それで、直す方法は？」
「うーん、こういうのにお約束ではあるんですけどー全部出し切っちゃえばいいっス、たまった分をこうゴシゴシっと」
「うう……やっぱりそうなのね」
さっきから起立したままのそれは布を押し上げて主張することを止めない、このままではずっとこの状態なのだろう。
「でも安里ちゃん、なんでこんなに大きくなってるんですか？」
「え、それは……」
「何か刺激がないと自然に大きくなるってことはあまり無いっスよねぇ。それともこの部屋に何か興奮するものでもあったんですか？」
「それは……」
「こおんな大きなものつけて人の部屋に遊びにきてそれで勝手に大きくして一体どうするつもりだったんすか？」
また耳元でささやくように、その声を聞いていると股のあたりのむずむずが大きくなる、知らず股をすりあわせるように……
「もしかしてこうやって私にされるの、期待してたんじゃないですか？ほら、こうやって上から……」
「ん、ひゃう！」
金潟すぐみの手が布越しに私を撫でる。
「ほーら❤すーりすーり❤すりすりー❤シュッシュッ❤うわーどんどん硬くなってくる❤もうガッチガチっすよー」
「あ❤あー」
「あー❤安里ちゃんもう顔トロトロッスよー❤そーんなに気持ちいいんスねー❤じゃあもーっとなで回してあげますよー❤今度はもーっと速く擦ってッシュッシュー❤シュッシューって❤擦るだけじゃなくて先っぽも❤ぐりぐりーって」
「あっ❤あひっ❤ちょ❤っよっ❤ひっ❤なんか昇って！」
「はーい❤終わりー」
「え……？　なんで……？」
「安里ちゃーん❤さっきの答えまだ聞いてないっスよー」
「さっきの❤答え？」
「ほらー❤なーんで最初から大きくしてたのかって❤答えてくれたら❤っ・づ・き　してあげるっスよー」「そ❤その……」
「だいじょーぶ❤誰にも言ったりしませんからー」
「はじめは❤なんともなかったの❤ただついてるだけだし❤よくあることだったみたいだから……でも部屋にきて❤いつものようにしてたのに金潟すぐみのことみたらだんだん❤大きく❤なってきて……」
「へえ❤じゃあ私で興奮したんスか？」
「ッ❤ンッー」
「あー❤これは答えなくてもいいっスよー❤だーってほーら❤こんなにおちんちんビクンビクンって❤素直になれたご褒美にまーた❤触ってあげるっスよー❤ほーら❤下から上にすーりすー❤何度も何度も往復させて❤今度は上から❤すーりすり。この先端❤触るとビクビクってしますねーやっぱり敏感なんスか？じゃあ先端と段差のとこまで集中的にぐーるぐるさわってあげますよー❤ぐーりぐり❤ぐりぐりー❤シュッシュ❤ぐーりぐーり。あー安里ちゃんまーた目がとろーんってしてきて❤とっても気持ち良さそうっスねぇ❤私の手がそんなに良いんですかー？」
「うん❤うん……金潟すぐみの手とっても❤気持ちいー

❤根元のあたりがじんじんして❤ふわーってふわーって」
「はーい❤素直な安里ちゃんはカワイイっスよー❤じゃあもっと強くするっスよー❤ほーら❤ぐりぐり❤ぐりぐりー」
「あっ❤や❤だめ❤も❤漏れちゃう❤よ。んひぃ」
「だしちゃえ❤だしちゃえ❤ほら❤びゅ❤びゅーって❤ほらほらー❤だせ❤射精しちゃえ！」

**どびゅどびゅるるる❤❤**

「ンンッー！！！！」
「うっわー安里ちゃんすごいっスよー❤ビクビク脈打ってドクドクしてる❤身体海老反りにして❤目を見開いて❤頭バチバチーって感じっスか？ドクドクするたび快感が走り回るっスよー」
「アッ……カハッ！ゴホッゴホッ！」
「呼吸忘れるくらい気持ち良かったんですねー」
「あ……やあ……ショーツのなかぐちょぐちょで……よごれちゃ……んん……」
「はーい❤じゃあズボンと下着❤脱ぎ脱ぎしましょうねー❤うわぁいっぱいでましたねぇ❤どろっどろのゼリーみたいっスよー」
「やぁ……みないでぇ……」
「でもこれって安里ちゃんが『私』で気持ちよくなってくれたってことなんですよね？」
「ッ……」
「あ❤今ピクンってしましたよ❤まだ全然ガッチガチのままだし❤もーっと気持ちよくなりましょうねぇ」
「うん……ん……」
「ふふっ❤素直な安里ちゃん❤とってもかわいい」
「じゃーん❤次はこれっスよー」
「ん……なあにそれぇ……ぶよぶよ……？」
「安里ちゃんまだちょっと放心状態っスねーじゃあ……ローションはつけないで……先にあてがって……それっ！」
「ン❤ンギイイ！こ❤これ何い……？」
「これは安里ちゃんをきもちよーくしてくれる穴ですよー『オナホール』っス❤安里ちゃんぼーっとしてるからちょーっと強めの刺激を感じてもらったっスよー。安里ちゃんのでドロドロでしたし……だいじょーぶすぐに気持ちよくなるっスよー❤ほーらギュッギュッと❤やーっぱりちょっとすべりは悪いですね❤でもほら❤ぎゅっぎゅってすこーしずつうごかせば❤ぐーりぐりってねじるようにも」
「ん……イボイボしてて……段々……ずりずりってぇ」
「んふふ❤やあーっぱりすぐにヌルヌルになってくるっスよねー❤安里ちゃんが気持ちいー気持ちいーってなるとどーんどんヌルヌルが先っぽから出てきますよー❤これならもう動かせますねー❤ほーらジュッボジュッポ❤ぎゅっぽぎゅっぽ❤ぐーりぐりー」
「あっ❤これ❤すごっ❤い❤ぐちゅぐちゅでぇ」
「安里ちゃんまーた気持ち良さそうにとろけるような顔して❤ほーら❤スピードあげるっスよー❤ぎゅっぷぎゅっぷ❤じゅぷじゅぷじゅぷ❤」
「んひっ❤あひっ❤ンギッ❤ま❤また❤昇って❤で❤でちゃう❤でちゃうう❤」
「いーっぱいださないと戻らないですからねー❤ほーらだしちゃえ❤だしちゃえ❤」
「だめだめ❤でちゃう❤でちゃうぅ❤」

**びゅーびゅるるる❤びゅる❤びゅるう❤**

「お❤おほっ❤ふひぃ❤で❤でる❤でる❤」
「びゅくびゅくでてるっスねー2回目なのにさっきよりでてるんじゃないですかーこれ？あーすごい脈うってびくんびくんって」
「はひー❤はひー❤ふぃー❤ふー」
「落ち着いたみたいっスねーじゃあはずしますよーぬるぬるーっと❤うわあ❤すっごーいどろぉーって垂れてきます❤指ですくって匂い……なんか嫌じゃない不思議な感じ❤じゃあペロッと❤ねばっこくてこれも嫌じゃないけど……みたいな」
「金潟すぐみぃ❤それなんかすごいえっちぃ❤」
「安里ちゃんすーぐに臨戦態勢っスねー❤それじゃあ……」
「え❤服なんて脱ぎだしてどうしたの金潟すぐみ」
「気持ちよくなりたいのは安里ちゃんだけじゃないってことっス❤ほら❤私のここ❤こーんなに塗れてぐしゃぐしゃなんですよ？　安里ちゃんのいじってたらこっちもお腹の下がきゅんきゅんなってあーっというまにびしょびしょッス❤だからぁ❤ね？安里ちゃん❤お願い❤」
「はぁ❤はぁ❤いぃ❤いいのね？」
「準備万端っスよ❤ほら❤うんん❤」
「んんん❤ヌルッて❤すごぉ❤」
「はぁ❤はぁ❤安里ちゃん❤私の中❤気持ちいい？」
「すごっ❤すごいよぉ❤ヌルヌルしてるのにぎゅっぎゅって」
「さっきのオナホールとどっちがですかぁ」
「こっち❤こっちぃ❤金潟すぐみのほうが❤全然すごいのぉ❤」
「あー安里ちゃん本当にかわいい❤じゃあほら動いてみましょ？ほーらほーら」
「こう？ん❤んん❤ひっ❤ひっ❤はぁ❤はぁ❤」
「ん❤ん❤そう❤いい感じっス❤じゅぷじゅぷ❤パンパン❤おっ❤ん❤そこ❤そこ❤手前のザラザラしたとこお❤浅く❤はやく❤じゅぷじゅぷって❤」
「ふっ❤ふひー❤ひっ❤刺激❤強すぎ❤ひぎっ❤ひ❤でも❤もっと❤もっとお❤奥❤奥いれたいぃ❤」
「あ❤安里ちゃ❤それ❤それもすご❤奥❤奥❤ズンズンってぇ❤」
「か❤金潟すぐみ❤気持ちいい❤気持ちいい？　安里は❤すごっ❤」
「安里ちゃん❤私もすごい❤気持ちいい❤から❤好きに❤好きに動いてぇ❤ねぇ❤ねぇ❤安里ちゃん❤キス❤キスしてぇ❤もっと気持ちよくなろ？」
「はぁはぁ❤キス❤キス❤もっと❤気持ちよく？ん❤ジュル❤ジュルル❤チュパ❤チュパ」
「んはー❤ジュルル❤ジュビ❤チュパ❤チュパ❤チュルルル❤」
「ふー❤ふー❤奥も❤もっと突くわ❤唇ももっともっと❤吸ってあげる❤」
「安里ちゃぁん❤おくぅ❤すごいのぉ❤ぐりぐりされて❤ツンツン❤ゴンゴンってぇ❤」
「はぁ❤はぁ❤もうでるわよ❤だすわよ❤」
「うん❤このまま❤中❤でぇ❤」
「金潟すぐみ！あなたの金型に❤安里のA液❤射してあげる！」
「んんん❤」

**どびゅ❤どぼぼぼぼ❤びゅーびゅる❤びゅる❤**

「はひ❤はーはー❤」
「いっぱいでたっスねぇ❤ほら❤こんなに」
「うわほんと……」
「ねえ❤安里ちゃん❤『次』はいつしましょうか」

## ■すずのもく　氏

この度は素敵な合同誌に参加させていただき、誠にありがとうございました！
アリスギア同人界隈のふたなりスケベブック率の高さには驚きましたし
大変嬉しくもあります。どんどんエミッションちんぽが流行ればいいと思います。
今回は自分がシリーズとして描いている文シタふたなり漫画の番外編を
恐縮ながら描かせていただきました。楽しんでいただけたら幸いです！

## ■のだ　氏

アリスギア ふたなり合同！初同人誌ながら参加させて
いただきました。ナデちゃん描けて満足です。
企画があれば、また参加したいです～
さあレッツナデ活ナデ活

## ■エクシー　氏

作品名：秘密のシャノアール
著/ エクシー（twitter:@FAG_Exceed）

実はふたなりが大好物なので参加させていただきました＼(＝゜ω゜)ノ
でも最終的には乳首いじくってるシーンのほうが多かったかも……？

**他・今回の合同誌に**
**参加してくださった皆様**
**ありがとうございました！**

**同不順・敬称略**

## ■あとがき・編集後記

皆さま初めまして＆お久しぶり MoTo/ 風見です。
この度は色々とご縁と巡り合わせがありまして、このような合同誌（アンソロジー）を発行する事が出来ました。
まずはご参加くださった作者の方々に感謝の気持ちとお疲れ様を申し上げたいと思います。
そして素晴らしい…いやエロい原稿の数々、読者の皆さまにも頼んしんで頂ければ幸いです。

今までもゲスト原稿は頂いていたのですが、本格的に多人数が参加する本の編集は初めてだったので、色々と大変でしたが良い体験になりました。
次もこのような機会があれば幸いだと思っています。
その時は皆さま、また宜しくお願いします。

・・・さて、個人誌の原稿がんばらんきゃ（汗

7月某日・MoTo/ 風見

奥付
発行　D☆G　発行人　MoTo
発行日　2019年　8月　9日
印刷所　ねこのしっぽ　様
連絡先
Eメール　dreamgirl@jcom.home.ne.jp
pixiv　id=419208
Twitter
https://twitter.com/DG_MoTo_kazami

禁　無断転載　未成年閲覧

KEEP OUT